# 独話と対話の連続性について考える

# Discussion on the continuity between monologue and dialogue

岡　田　祥　平
OKADA Shohei

## キーワード

［独話］monologue・［対話］dialogue・［言語的な構造］linguistic structure
［情報伝達の構造］structure of information transfer

## Ⅰ．はじめに―問題のありか―

言語学・国語学の世界では、独話（monologue）と対話（dialogue）とは性質が異なり、研究の差異には別個に扱うべきだという見方が存在しているようである。

たとえば、宇井英俊氏は、宇井（1971）で、「書きことば」と「話しことば」の分類に関する先行研究を概観した上で、以下の「五種類の言葉」のうち、「ことばがinpromptuに発せられるか、impromptuでなく発せられたか」を基準にして（重視して）、(A)・(B) を「話しことば」、(C1)・(C2)・(D) を「書きことば」とするという独自の分類を提案している。

> (A) 対話のことば、(B) スピーチ類のことば、(C1) 話しことば的に書かれたものの音読・朗読されたもの、(C2) 書きことばの音読・朗読されたもの、(D) 書きことば

そのうえで、宇井（1974）は宇井（1971）で「話しことば」であると分類した「対話のことば」と「スピーチ類（独話）」について、次の11項目の対比を行って、両者の差異を検討している。

> ①センテンスの長さ、②簡略形式、③異常表現（倒置など）、④不整表現、⑤誤用、⑥つなぎの言葉の使用、⑦共同作品的表現、⑧指示語の使用、⑨待遇表現の使用、⑩感動を表す助詞などの使用、⑪音便形・融合形

その結果、宇井（1974）は以下のような結論を導き出している。

> 上段にあげた一一の項目は、話しことばのセンテンスの構造、性格を論ずる時に問題となる事項であるが、これらの項目中、対話のことばの場合とスピーチ類のことばの場合と、

ほぼ同じ頻度で現われるのは僅か三項目で（①と⑥と⑪）あとは、明かに両者間に相違がある。（むしろスピーチ類と書きことばの方に共通点が多い。②⑦⑨は両者間でほぼ一致し、③④⑤⑧⑩はどちらにも殆どあらわれない。）

（中略）

何れにしても、対話のことばとスピーチ類のことばとは、音声でコミュニケートする点では同じであるが、実はかなり違った言語的立場で発話され、ある点では、スピーチ類は書き言葉のほうにその形が近く、従って、言語としての性格も、書きことばに近いのである。こういうことを考えると、話しことばの性格、構造を論ずる際、対話のことばとスピーチ類とは、一括して同列に検討するのは適切ではないという事になる。

つまり、宇井（1974）は、独話と対話は、同じ「話しことば」というグループに分類できるが、決して同一の構造・性格を持つものではない、と結論付けていることになる。

また、国立国語研究所編（1955）は、いくつかの言語的要素について、「東京の日常談話」とニュース・ニュース解説（いずれも独話）と比較し、その両者の性質の違いがあると指摘している。国立国語研究所編（1955）の結果は、宇井（1974）の「話しことばの性格、構造を論ずる際、対話のことばとスピーチ類とは、一括して同列に検討するのは適切ではない」という指摘に沿うデータであるといえよう。

宇井（1974）のような認識は、工学的な立場からの言語研究の分野でも共有されているようである。たとえば、前川ほか（2000）は、『日本語話し言葉コーパス』が独話中心のコーパスとして設計した理由の一つとして、「音声認識研究での利用を想定した場合、モノローグと対話とでは言語モデルが根本的に異なってくることが予想される」ことをあげている。この前川ほか（2000）の記述は、少なくとも音声認識研究に代表される工学的な立場からの言語研究では、独話と対話は截然と分けるべきではないか、という認識が浸透していることを窺わせる（ただ、前川ほか2000は、「予想される」という表現をしているように、安易な断定を避けている点には留意したい）。

伊豆原（2002）は、「独話と会話はともに音声により伝達を図るものであるが、会話が話し手と聞き手が順番に話者交代を行って進められていくものであるのに対し、独話は伝達の方向が単方向である点において異なる」と指摘している。つまり、独話と対話とでは、関与する人間の数ややりとりされる情報の方向性、すなわち情報伝達の構造が異なる。それゆえ、少なくとも、独話と対話とは、「話しことばの性格、構造」（宇井1974）が異なる、あるいは「言語モデルが根本的に異なって」（前川ほか2000）いると考えるのが従来の指摘、認識のようである。

しかし、近年、必ずしも独話と対話は截然と分けられるわけではないのではないか、と指摘する声も出て始めている。

たとえば、加藤（2001）は「スピーチは、ことばだけ取り出せば「一方向」の伝達だが、ことば以外の相手の反応を合わせた「相互コミュニケーション」ある」と述べ、スピーチ（独話）であっても情報伝達の方向が単方向ではないことを示唆している。

また、土岐（2001）も、以下のように述べている。

意思の疎通が双方向に実現されるインターアクションの見方に従えば、例え「独話」に分類される発話形式であったとしても、話し手は「一方的に自分のペースで話を進めるだ

け」ではない。話すと同時に、自分の話し方をモニターしつつ聞き手の反応を窺い、聞き手の反応に応じて話のペース、時には内容の軌道修正を行ったりもする。「聞き手」がたとえ一言も発しなかったとしても、「話し手」は「聞き手」の表情や態度から何かを理解・判断する。受け身一方で、何もしないのではなく、意識するかしないかにかかわらず「話し手」の話の展開に影響し続ける点を忘れてはならない。

さらに、伊豆原（2002）にも以下のような指摘がみられる。

実際のところ、独話においても、聞き手が目の前にいる場合には話し手は、言葉による応答までは期待しないにせよ、聞き手の顔の表情、態度、笑いなどから聞き手の反応を受け取っている。話し手は聞き手の参加状況を見ながら、聞き手を話にどう引き込み、聞き手と知識の共有化をどう図るかを考えながら話を進めていく。

（中略）

こう考えてくると、独話もまた聞き手との一種の言語的・非言語的「対話」なのだ、と気づかされる。もともと一方通行的要素が強い独話であっても、「話す」という作業は「聞き手」がいて初めて成立するものであり、その話は聞き手にきちんと向けられた、聞き手の心に届くものでなければならないのだ。

宇井（1974）・前川ほか（2000）のような、いわば独話と対話とは異なるという認識と、加藤（2001）・土岐（2001）・伊豆原（2002）のような、いわば独話と対話の連続性を認める認識という二つの認識が生じる背景、理由は、先に引用した加藤（2001）のことば、すなわち独語は「ことばだけ取り出せば「一方向」の伝達だが、ことば以外の相手の反応を合わせた「相互コミュニケーション」ある」という点に集約されるであろう。すなわち、加藤（2001）の前者はどのような内容をどのような形態によって伝達するかという言語的な構造（ここには、分節的要素といった文字化可能な側面はもちろん、超分節的要素といった文字化不可能な側面も含まれている）を重視する見方であるのに対し、後者は情報伝達の方向性や話し手と聞き手の関係という情報伝達の構造を重視した見方である、ということである（以下、本稿では「言語的な構造」「情報伝達の構造」という術語を繰り返して使用するが、それぞれ本段落で定義した意味で用いる）。

独話と対話のどの側面を重視するか（言語的な構造の側面を重視するか、それとも情報伝達の構造の側面を重視するか）によってその両者の連続性を認めるか否かという見解の相違が生まれるということは、鈴木（1968）に如実に現れている。

鈴木（1968）では、「音声記号による言語的コミュニケーションを話しことば」と定義し、その「話しことば」を以下の三つに下位分類している。

本話しことば…日常の談話
変話しことば…講義や講演など
準話しことば…式辞の代読のように、書いたものをただ読み上げるようなだけという場合

鈴木（1968）では明示されていないが、上に示した定義を見ても分かるように、鈴木（1968）

の分類は、「本話しことば」は対話に、「変話しことば」と「準話しことば」は独話に、それぞれ相当すると考えられる。「変話しことば」と「準話しことば」は独話の下位分類的な存在であり、両者の差異は「講義や講演で原稿が用意してある場合、それをただ読み上げるだけならば「準話しことば」であり、原稿を元に話を進めていくというのなら「準話しことば」である」という、発話の自発性の高低に求められる(1)。

鈴木（1968）では、「話しことば」を以上のような下位分類にしたうえで、「「本話しことば」としての日常談話を四組（約二時間）」と「「変話しこと」(ママ)ば」と考えられるものを二例（約一時間）」（そのうち一例は原稿ありの研究報告、もう一例は原稿なしの大学での講義）の録音の文字化資料を対象(2)に、種々の「不整表現」の実態を記述し、両者の比較を行っている。その結果、「「不整表現」といわれるものが、必ずしも日常の談話に多く見られる訳ではなく、しかも話し言葉の性格に応じてそれぞれ違(ママ)つた「不整表現」がみられる」と指摘した上で、「本話しことば」（＝日常談話という対話）と「変話しことば」（＝講義・研究報告という独話）とで、「現れて来る「不整表現」が質的にも量的にも異なつてくる」とまとめている。その事実を踏まえたうえで、鈴木（1968）は、「「本話しことば」と「変話しことば」という分類が妥当であることを示すものともいえよう」という結論を導き出している。

以上の鈴木（1968）の指摘は、「不整表現」の現れ方という言語の構造的な側面から独話と対話を観察したものである。その結果導き出された結論は、独話と対話とは異なるといった宇井（1974）・前川ほか（2000）に沿う見解となっている。

その一方で、鈴木（1968）には、以下のように述べ、「本話しことば」（＝日常談話という対話）における「不整表現」と「変話しことば」（＝講義・研究報告という独話）における「不整表現」には、共通点があることも示唆している。

> 「本話しことば」と「変話しことば」とでは、「不整表現」の生ずる理由や、それの果たす機能について、以上のような違いが見られるが、共通の地盤も当然考えられる。それは、話しことばでは、話し手は、送り手の言語的乃至非言語的記号によるフィード・バックを元に、絶えず表現を調整しているということである。コミュニケーションが成立したことがフィード・バックによつて確認されれば、中途で言いさすこともあろうし、指示詞ですませてしまうこともあろう。聞き手の表情で理解されていないことを知れば、表現を重複させたり、挿入したりすることもあろう。このように、言語的乃至非言語的コミュニケーションによるフィード・バックが、話し手の表現に影響を及ぼして、「不整表現」を生むこともある訳である。

以上の鈴木（1968）の指摘は、いわば、「本話しことば」（＝日常談話という対話）も「変話しことば」（＝講義・研究報告という独話）も、聞き手からのフィード・バックが存在し、それが「不整表現」の生起に影響を与えているという点は共通している、とまとめることができるよう。このような見方は、情報伝達の構造を重視し、独話と対話とに連続性を認めるという、加藤（2001）・土岐（2001）・伊豆原（2002）に沿う見解である。ただし、鈴木（1968）が認める独話と対話の連続性はあくまで情報伝達の構造についてであり、言語的な構造における連続性については認めてはいない。

ここまで紹介した先行研究での議論をまとめるならば、繰り返しになるが、種々の先行研究

で観察された、独話と対話の連続性を認めるかという認識の差異は、言語的な構造の側面を重視するか、情報伝達の構造の側面を重視するかという立場の違いに求められる、となる。本稿で問題にしたいのは、そのような先行研究の流れを踏まえた上で、言語的な構造の側面から独話と対話を眺めた場合においても、宇井（1974）・前川ほか（2000）が指摘するように、本当に独話と対話とが截然と分けられるのか（あるいは、分けるべきなのか）ということである。本稿では、言語的な構造の側面を重視して独話と対話を眺めた場合でもその両者に連続性があることを指摘した先行研究を紹介することで、独話と対話の連続性というトピックについて、改めて考えていきたい。

言語的な構造といっても、音声・語彙・文法・談話といったさまざまなレベルが存在する。本稿では、Ⅱ．では音声の分節的要素について、Ⅲ．では音声の超分節的要素について、Ⅳ．では語彙・形態的特徴について、それぞれ独話と対話の連続性が認められる事例を指摘した先行研究を紹介したうえで、独話と対話の連続性というトピックについて改めて考えていくことにする。このことは、言語研究における資料性の問題（どのような性格の資料を分析の対象にしたか）や、独話教育のあり方について、再考する一つの材料になると考える。

## Ⅱ．分節的要素について

現代日本語の東京方言には、母音が無声化する現象が観察される。母音無声化の生起には音韻環境が深く関係していると言われているが、母音が無声化する典型的な音韻環境の一つとして、一般音声学や日本語音声学、日本語音声教育の概説書でしばしば言及されるのが、文末に位置する「デス」・「マス」の「ス」の母音/u/である。つまり、「デス」・「マス」が文末に位置した場合、「ス」の母音/u/は原則的には無声化するという（国際交流基金1978・国際交流基金（今田）1981・前川1989・小泉1993・池田2000・鹿島2002）[3]。特に前川（1989）は以下のように述べ、文末における「デス」・「マス」の「ス」の母音/u/の無声化にはある種の「規範性」があることを指摘し、文末における「デス」・「マス」の「ス」の母音/u/は無声化することが原則であることを示唆している。

> 話者の言語感覚を問題にすると、母音の無声化生起には一種の社会的な規範性が認められる。今、東京方言を例にとると「はい、そうです。」という発話末尾のスはほとんど例外なく無声化しており、これを有声母音で発音すると、東京方言としてはむしろ異様な印象を与える発話になってしまう。

文末における「デス」・「マス」の「ス」の母音/u/の無声化には前川（1989）が指摘するような「規範性」が認められるゆえに、「特に、文末の「…です」、「ます」の「す」の［ɯ̟］をはっきり響かせてしまうと、不自然に聞こえることがある」という記述が導き出される。（国立国語研究所（今田）1981、ただし「不自然に聞こえることがある」という表現は、「不自然に聞こえないこともある」可能性を示唆する、幾分譲歩的であることも事実である）。

一方で、土岐（1986）は、文末における「デス」・「マス」の「ス」の母音/u/の無声化は必然的に生起するのではなく、「話し相手との関係や心的距離によって無声化したり、しなかったりする」と指摘している。つまり、土岐（1986）は、文末における「デス」・「マス」の

「ス」の母音/u/の無声化は原則的に生起するのではないことを示唆している。同時に、土岐（1986）は、文末における「デス」・「マス」の「ス」の母音/u/の無声化を、「話し相手との関係や心的距離」を調整したり、あるいは示したりする手段であるととらえているようである。

さて、引用した前川（1989）の指摘、ならびに土岐（1986）の指摘を踏まえると、以下のような仮説を導き出すことができる。文末における「デス」・「マス」の「ス」の母音/u/が無声化しない場合は「異様な印象を与え」（前川1989）るため、文末における「デス」・「マス」の「ス」の母音/u/が無声化で実現されるのが原則的である。ただ、「話し相手」の存在を意識しやすいがゆえに、「話し相手との関係や心的距離」を調整したり、あるいは示したりする必要性が高いと考えられる対話では、文末における「デス」・「マス」の「ス」の母音/u/の無声化が生起しない場合もある。それは、文末における「デス」・「マス」の「ス」の母音/u/の無声化に、「話し相手との関係や心的距離」を調整したり、あるいは示したりする機能があるためである。一方、「話し相手」の存在を意識しにくい独話では、「話し相手との関係や心的距離」を積極的に調整したり、あるいは示したりする必要性はないため、文末における「デス」・「マス」の「ス」の母音/u/の無声化で実現されるのが原則的である。

以上の仮説は、文末における「デス」・「マス」の「ス」の母音/u/の無声化という現象に対して、独話と対話とで異なる傾向がある可能性が存在することを意味する。つまり、上記の仮説が正しいことが証明できれば、独話と対話が異なるということが（間接的に）証明できたことになる。

それでは、本当に独話では、文末における「デス」・「マス」の「ス」の母音/u/は無声化で実現されるのが原則的なのであろうか。このことを調べた研究としては、岡田（2005）がある。

岡田（2005）では、国立国語研究所等が製作した自発発話の大規模音声コーパスの『日本語話し言葉コーパス』（Corpus of Spontaneous Japanese、以下CSJと表記する）(4)の「コア」(5)と呼ばれる部分におさめられた独話データ（時間にして39時間、ファイル数にして177ファイル、異なり人数で137人）を使用し、文末(6)における「デス」・「マス」の「ス」の母音/u/の無声化の実態を調べ、以下のような結論を導き出している。

（1）話者全体を大きく三つのグループに分けることが出来そうである
　i　文末における「デス」・「マス」の「ス」の母音/u/を双方とも完全に無声化で実現する話者（無声化率が100%の話者）…全話者の約3割（強）
　ii　文末における「デス」・「マス」の「ス」の母音/u/を双方とも、非無声化・無声化の双方の発音を併用している話者…全話者の約3割（弱）
　iii　文末における「デス」の「ス」の母音/u/は完全に無声化で実現する一方、文末における「マス」の「ス」の母音/u/は非無声化・無声化の双方の発音を併用している話者…全話者の2割（弱）
（2）（1）のような事実を踏まえると、（独話において）文末における「デス」・「マス」の「ス」の母音/u/は典型的な母音無声化環境とは、必ずしも言えないようである
（3）（1）の　に分類される話者のデータを分析した結果、特に文末における「マス」の「ス」の母音/u/について、非無声化生起がしやすい話者属性の傾向を見出すこ

とが出来る（女性・若年層の非無声化率が高い）

（4）CSJのコアには学会講演と模擬講演という2種類のデータが含まれているが、学会講演よりも模擬講演で、文末における「デス」・「マス」の「ス」の母音/u/の母音非無声化が生起しやすい

独話と対話の連続性を検討するという本稿の目的で重要になってくるのは、（1）と（4）の結果である。

（1）の結果は、首都圏方言話者（この表現については、註5を参照）であっても、文末における「デス」・「マス」の「ス」の母音/u/が独話であっても、無声化しない場合があることを意味している。すなわち、（1）の結果は、たとえ独話であっても聞き手の存在を意識し、あるいは話し手が聞き手の影響を受けるという、独話にも対話に類似した側面があることを意味していると考えられる。

そのことは（4）の結果をみるとより明確になる。ただ、その前提として、「学会講演」と「模擬講演」という、CSJにおける二つの独話のタイプについて、説明する必要があろう。

学会講演とは「日本国内で開催される種々の学会での研究発表のライブ録音音声」（前川2001）のことである。「学会講演は実際の研究発表のライブ録音ですから、データの自然性という点では大変にリアルな音声」（前川2001）であるものの、話者の性別や年齢、使用語彙に偏りが存在する[7]。そのような学会講演の「欠点を補正するために考案された」（前川2001）のが、模擬講演である。「模擬講演とは、人材派遣会社から派遣された話者によるスピーチのこと」（前川2001）であり、話者の年齢・性別のバランスのとれた構成になっている。

学会講演の場合は話者によっては原稿を朗読していることもあるが、模擬講演の場合「簡単なメモやレジュメを参照することはかまいませんが、原稿を朗読する形での講演は許され」ない（前川2001）という。したがって、総じて、学会講演よりも模擬講演のほうが自発性が高いと考えられる（前川2004）。

さらに、学会講演と模擬講演とでは、収録の際、以下のような違いが存在している（前川2001）。

> 学会講演よりも日常の談話に近いスタイルのスピーチを収録するために、（引用者註：模擬講演収録時には）「あまり形式ばらずにリラックスして普段どおりに話してください」という指示を与えています。もちろんこれだけでは効果が期待できませんから、収録に先立って収録スタッフと一定時間雑談をかわす、収録中もスタッフが積極的にあいづちをうつなど、学会講演よりもリラックスした雰囲気を実現するように努めています。

一方、「学会講演話者には働きかけようがないので、何も対策を施していない」（前川2004）という。その結果、「いずれも素朴な対策ではあるが、一定の効果を発揮したことは、データの解析によって確認できる（前川2001）」（前川2004）という。

前川（2001・2004）の記述を踏まえると、独話とはいえ、学会講演よりも模擬講演のほうが、相対的（かつ個人差もあろうが相対的）に、いくつかの点で[8]「日常の談話」（＝対話）に近い性質を持つ、ということである。つまり、独話であっても対話に近い独話とそうではない独話とが存在していることを意味し[9]、上記（4）の結果は、より対話に近いタイプと考えら

れる独話（＝模擬講演）において、文末の「デス」・「マス」の「ス」の母音/u/の無声化が生起しにくいということを意味する。つまり、対話に主に出現すると考えられる言語的な構造の特徴（文末の「デス」・「マス」の「ス」の母音/u/の無声化）が、独話においても観察されるということである。これは、言語的な構造の側面からも、独話と対話の連続性が認められることを意味するのではないだろうか。

以上の議論をまとめると、以下のようになろう。

岡田（2005）が示した（1）の事実は、「話し相手との関係や心的距離」を調整したり、あるいは示したりする機能を持つと考えられる文末の「デス」・「マス」の「ス」の母音/u/の無声化／非無声化の問題（土岐1986）が、「話し相手」の存在を意識しやすいと考えられる対話だけではなく、独話にも生起することを意味する。また、岡田（2005）が示した（4）の事実は、「対話に近い性質を持つ独話」（＝模擬講演）のほうが、文末の「デス」・「マス」の「ス」の母音/u/の無声化が起きないことを意味する。これらの事実は、情報伝達の構造の側面だけでなく、母音の無声化の有無という言語的な構造においても、独話と対話の連続性が認められることを意味するのではなかろうか。

## Ⅲ．超分節的要素について

「『日本語話し言葉コーパス』（前川2004）に基づいて独話と対話の比較を行ない、両者の類似点・相違点を定量的に明らかにすることを目的」（小磯2006a）とした小磯（2006a・b）は、CSJにおさめられたデータの中から、同一話者6名による独話（学会講演および模擬講演）と対話（自身が行った学会講演、および模擬講演に対するインタビュー、いずれも分析対象話者はインタビュイー）を対象に、独話と対話の韻律的特徴ならびに統語的特徴の異同を分析し、以下のような事実を報告している。

（5）学会系（学会講演とそれに対するインタビュー）と模擬系（模擬講演とそれに対するインタビュー）とでは、かなり異なる傾向を示す。（学会講演および模擬講演の性格については、前節の記述も参考のこと）

（6）韻律的特徴については以下のような傾向が認められた。

i　句末境界における上昇下降調は、「学会系については、全体としては独話より対話に多く見られるという傾向を示したものの、全ての話者・文脈がこの傾向を示したわけではなく、一部は独話と対話で差が見られないという結果であった。また模擬系については、大半の話者毎・文脈毎の結果も含め、独話と対話で出現比率に差は見られなかった」（小磯2006a）。

ii　句末境界における下降調および上昇調は、「模擬系では、全体及び一部の話者・文脈で、下降調は対話に、上昇調は独話に多いという傾向が見られたのに対し、学会系では、話者毎・文脈毎の結果も含め概ね逆の傾向を示した」（小磯2006a）。

（7）統語的特徴については、「対話における文単位は、あまり多くの節を含まず短く発話されるのに対し、独話では、節単位が複数含まれ時間的に長く発話されることも少なくないことが分かった。特に後者の傾向は模擬系で顕著に見られた」（小磯

2006b)。

（8）言語形式と韻律との関連を調べた結果、次のような傾向があった。「模擬系独話のようにくだけた雰囲気の独話では、統語的に文末表現をおかないことも少なからずあるが、そのかわり韻律によって意味上・談話上の区切りを示すことも多いと考えることができる。一方学会系独話では、対話よりは若干文は長いものの、模擬系独話のように長い単位は頻出せず、またBI（引用者註：Break Index。韻律境界の切れ目の強さに関する情報のこと。詳細は五十嵐ほか2006などを参照）の結果も差がないことから、この種の発話の仕方はあまり多用されないと言えるだろう」（小磯2006b)。

小磯氏が指摘する上記（5）・（6）ii・（8）の事実は、ある発話をカテゴライズする際、独話と対話という発話の種類よりも話題の種類を優先させたほうがいい場合もあることを意味している。この小磯氏の上記（5）・（6）ii・（8）の指摘は、従来言われてきているように独話と対話が必ずしも異なるというわけではない（場合によっては独話か対話かという違いよりも話題の違いが、言語的な構造の違いに反映することを示唆しているとはいえるのではなかろうか)。

反面、小磯氏が指摘する上記（6）iの事実は、少なくとも句末境界における上昇下降調の使用については、話題による差や個人差は認められるものの、独話と対話で顕著な差を見出せないことを実証している。つまり、小磯氏が指摘する（6）iの事実は、韻律的特徴という言語的な構造においても、独話と対話とに連続性が認められる可能性を示唆していると考えられる。

それでは、小磯氏が独話と対話で顕著な差を見出せなかったとする上昇下降調は、どのような機能を持つのであろうか。イントネーションの型の分類ならびに機能の分類には諸説あるが、本稿では、過去の先行研究ならびに最新の知見を踏まえ論じた郡（2003）に従って、上昇下降調の機能を確認する。なお、郡（2003）は「文末と文節末では、同じ音調でも機能は異なる」と指摘しているので、ここでも文末における上昇下降調と文節末における上昇下降調とを分けて論じていく。

郡（2003）は、上昇下降調は「動きが他の音調より大きく、特に耳につきやすい」ため、文末で使用される場合、「聞き手の注目を引きつけ、訴える意図を表す」と定義している。

また、郡（2003）は、上昇下降調が文節末で多用されると「尻上がりイントネーション」になるが、「尻上がりイントネーション」には次のような機能があると指摘する。

> この音調はほかに比べて音の動きが大きく、特に耳につきやすい。したがって、文節末に用いられると、話がまだ続くことを必要以上に強調することになる。これは、他人が話に割り込んできてほしくないという気持ちを強く表示することにもなる。話し手としては自分に余裕や自信がないときに身を護る盾として使える。一方、耳につきやすいということは、聞き手の注目を引きつける力が強いということでもある。

つまり、上昇下降調は、文末で使用されるにせよ、文節末で使用されるにせよ、聞き手への訴えかけの度合いが増大するという、いわば情報伝達の構造に関わる機能を持つ。そして、言

語的な構造の問題よりも主に情報伝達の構造、つまり話し手と聞き手との関係に関わる（重点が置かれる）イントネーションは、郡（2003）に従う限り、上昇下降調以外に存在しないようである[10]。つまり、言語的な構造の問題に属する韻律的特徴であっても、情報伝達の構造の表示の機能を持つものについては、独話と対話とに共通点を見出すことができる、ということである。

一方、小磯氏が指摘する（6）iiの事実は、情報伝達の構造の表示の機能を（積極的には）持たないと考えられる韻律的特徴では、独話と対話との連続性を見出しにくいということを示唆している。また、小磯氏が指摘する（7）の事実は、統語的特徴、つまり文字化した際に観察される特徴に関しては、独話と対話で異なる傾向を見せることを意味している。宇井（1974）や鈴木（1968）のように、言語的な構造を重視した際、独話と対話は截然と分けられるという結論を導き出した先行研究は、主に統語的特徴（文字化されたデータ）という言語的な構造に着目してきたためだと考えられる[11]が、小磯氏の（6）ii・（7）の指摘は、言語的な構造を重視した従来の立場からの指摘と矛盾しない。

以上のことから、次のような結論を導き出すことができるのではなかろうか。言語的な構造の側面からは、宇井（1974）や前川ほか（2000）が指摘するように、独話と対話に連続性があるとは言い難い。したがって、独話と対話の韻律的特徴を比較した際、言語的な構造にかかわるイントネーションについては、その両者に共通点を見出すことは難しい。その一方で、情報伝達の構造の側面からは、加藤（2001）・土岐（2001）・伊豆原（2002）が指摘するように、独話と対話に連続性が認められる。それゆえ、情報伝達の構造の表示にもかかわるイントネーションについては、その両者に共通点を見出すことが可能となる。

言語的な構造の側面からは独話と対話の連続性は認めがたい以上、言語的な構造を明示する機能を持つ大部分のイントネーションについては、独話と対話で異なる傾向を見せると考えられる。しかし、イントネーションの中には、主に情報伝達の構造にかかわるものも存在する。情報伝達の構造の側面からは独話と対話の連続性は否定し難いゆえに、情報伝達の構造にかかわるイントネーションについては、独話と対話との間に連続性を見出すことが可能ということになる。そのため、結果的に、言語的な要素であっても、一部のイントネーションに関しては、独話と対話の連続性が認められるという結論に至るわけである。

## Ⅳ. 語彙・形態的特徴について

Ⅰ．でも触れたように、宇井（1974）は、言語的な構造、中でも語彙や形態的特徴の観点から、「対話のことばとスピーチ類のことばとは、（中略）実はかなり違った言語的立場で発話され」（宇井1974）ていると指摘している。しかし、伊豆原（1998・2001）のように、語彙や形態的特徴の側面から、独話と対話の連続性を示唆した研究も存在する。本節では、伊豆原（1998・2001）を紹介しながら、語彙や形態的特徴の側面から観察できる独話と対話の連続性を論じていくが、その前に、伊豆原氏の立場について、簡単に説明しておく。

伊豆原氏は、伊豆原（1998・2001）では、独話の重層性を「話し言葉的」・「書き言葉的」という概念を用いながら説明している。それらの概念の定義は、以下のとおりである（伊豆原1998、なお、引用文中の註はここでは引用しなかった）。

話し言葉（音声を媒材にする言葉）を考えるとき、話し言葉らしい話し言葉、書き言葉に近い話し言葉といった言い方がされることがある。今仮に表１のように日常の雑談を話し言葉の一番左に、そしてニュースを一番右に位置づけ、走り書きのメモを書き言葉（文字を媒材とする言葉）の一番左に、そして新聞記事や学術論文を一番右に位置づけるならば、日常の雑談とニュースの距離はニュースと新聞記事の距離よりも遠いものに感じられる。話し言葉と書き言葉は截然と分けられるものではなく、その姿は実は連続的であり、また話し言葉と書き言葉のうちどのジャンルを取り上げてみても、その姿は話し言葉と書き言葉の連続性の中にある。

（表１）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 〈話し言葉的〉 | 雑談 | ⟷ | ニュース |
| 〈書き言葉的〉 | メモ | ⟷ | 新聞記事 |
| 〈相手〉 | （特定） | | （不特定） |

（中略）

話し言葉の一般的な特徴として１文が比較的短いこと、あいづちや感動詞、間投助詞や終助詞が使われること、指示語が比較的多く使われること、助詞の脱落現象が見られること、言い差し文（中止文）、不整文、倒置文が見られること、待遇表現が使われること、繰り返しや言い間違い・いいよどみがあること、漢語の使用が比較的少ないこと、文末に「ダ・デス・デゴザイマス（デアリマス）」を使うことなどが上げられている。そして書き言葉は話し言葉と反対の特徴を持つものとして、あるいはその要素が少ない（多い）ものとしてとらえられている。どうやらわたしたちは話し言葉については表１に示したようなスケール上の一番左に置かれるもの（日常の雑談）を、書き言葉については一番右に置かれるもの（新聞記事や論文などを）それぞれの典型としてイメージしているようだ。そしてわたしたちが話し言葉的・書き言葉的というとき、この典型からの隔たりや近さを基準においているのである。

表１での雑談とニュースの距離、ニュースと新聞記事の距離を考えると、独話を分析するにあたって、話し言葉的（話し言葉の一般的特徴をどのくらい持っているか）、書き言葉的（話し言葉の一般的な特徴からどのくらい遠いか）という視点からの分析は有効な視点であるように思われる。

以上の記述から、伊豆原氏は、「話し言葉的」な音声言語[12]とは対話の要素を多分に含んでいるもの、「書き言葉的」な音声言語とは独話に等しいと考えていることが伺える。

そのような用語の使い方をする伊豆原氏は、伊豆原（1998・2001）で、以下の４種類の独話文字化資料を対象として、独話の中にも「話し言葉的」なものと「書き言葉的」なものとがあることを論じている（伊豆原1998も伊豆原2001も、以下の四つの資料を用いている）。

1．黒柳徹子「私の国際交流」国際交流基金10周年記念講演　1982.10.9
2．立花　隆「知の現在」NHK教育テレビ『人間大学』　1996.9.16
3．立川昭二「江戸人の生き方」NHK教育テレビ『視点・論点』　1996.10.23
4．大森　弥「敬老社会の社会システム」NHK教育テレビ『視点・論点』　1996.10.15

伊豆原（1998）では、1・2が「話し言葉的の特徴が強く現われている独話」、4が「書き言葉的要素の強い独話」、3は双方の要素を持ち合わせているが「どちらかといえば話し言葉的要素の強い独話」であると分析している。つまり、独話の中にも「話し言葉的」なものと「書き言葉的」なものとがあるという伊豆原氏の指摘は、独話といっても単純に一括りにはできず、独話の中にも対話的なものとそうでないものが含まれる、ということを意味する。それは、同時に、独話と対話といった単純な二項対立で捉えるべきものではなく、独話と対話に連続性が存在することを示唆していると考えられる。上で議論した伊豆原氏の「書き言葉的」・「話し言葉的」という用語の使い方・定義を踏まえ、本稿における用語を使用して表現すれば、1・2は対話的な独話、4が独話的な独話、3はどちらかといえば対話的な独話、ということになるであろう。

それでは、具体的に、伊豆原氏はどのような側面から、「話し言葉的」（＝対話的な）な独話と「書き言葉的」（＝独話的な）な独話があることを論証しているのであろうか。

まず、伊豆原（1998）は、話し言葉的な要素の強い独話は、書き言葉的な要素が強い独話と比較して、フィラー・指示語・終助詞・間投助詞・言い差し文が多く出現する、といった特徴があると指摘したうえで、以下のように述べている。

> 独話を話し言葉的か書き言葉的かに分ける最大要因は話し手が与えられた状況の中でどのような準備をするか、伝達に際して聞き手に向かってどのように伝えようとしているかである。独話では全体の組立はおなじように構造的、論理的であることが目指されるが、作り出される1文1文には違いがある。たとえば時間的制約の大きい「敬老の社」（引用者註：上記4の資料）では必要な情報を限られた時間内に効率的に伝達するためにであろう、1文1文があらかじめ整えられ、重複などの無駄のない完成度の高い文になっている。同じく「江戸人の」（引用者註：上記3の資料）も文は比較的整えられている。それに対して言語化がその場でなされる「私の国際」（引用者註：上記1の資料）や「知の現在」（引用者註：上記2の資料）はフィラーや言葉の繰り返し、指示語の使用、また頻繁な「ね」の使用など話し言葉の時間性、一回性、聴覚性からくる特徴を持っている。

つまり、伊豆原（1998）は、時間的・空間的な制約[13]が少なく即興性も許容される独話は、独話であっても話し言葉的（＝対話的）な要素を持つ、と主張しているわけである。そこから、言語的な構造の側面からも独話と対話の連続性が認められる、という結論を導き出すことができる。

また、伊豆原（2001）は、話し言葉的な独話と書き言葉的な独話とでは、指示語の使用に以下のような差異が認められると指摘している。

（9）話し言葉的独話のほうが指示語の使用が多い

(10) 話し言葉的独話ではくだけた形態（「そういう」・「そんとき」・「こうやって」など）が使用される一方、書き言葉的独話では改まった形態（「そのためには」・「そのことは」・「こうした」など）が使用される話し言葉的独話では「コ」系のフィラーが多い上に、フィラーと指示語は連続的である一方、書き言葉的独話では「コ」系のフィラーの使用がない

(11) 話し言葉的な独話における指示語は多様な機能を持つが、書き言葉的な独話における指示語は先行文脈を照応する機能しかない（そのため、書き言葉的な独話における指示語は「文を構成する一要素として不可欠なものであり、取り去ることはできない」）

(12) 話し言葉的な独話における指示語が指し示すものの中には、談話の文脈内になく聞き手の推測に依存している

(13) 書き言葉的な独話における指示語の中には、名詞を強く限定する指示語が存在する[14]（この種の指示語は書き言葉にも見られるものである）

伊豆原（1998・2001）の以上のような結果は、指示語・終助詞・間投助詞といった言語的な構造の側面の典型的な例といえる語彙や形態を考慮しても、独話と対話の連続性を認めることが出来るということを意味する。このことは、言語的な構造の側面を重視して独話と対話の連続性を認めることに懐疑的であった従来の研究のあり方に一石を投じるという意味で、重要な意味を持っているのではなかろうか。

# V. まとめ

以上、本稿では、種々の先行研究を概観することで、言語的な構造の側面にも、独話と対話の連続性を認め得る事実・現象が存在することを確認した。このことは、畢竟するに、独話と対話の連続性は主に情報構造にかかわる点で認められるが、その連続性が言語的な構造の側面にも滲み出ている、ということを意味しているのではなかろうか。

本稿での主張をまとめると、以下のようになろう。言語的な構造の側面を重視し、独話と対話の連続性を認め難いとする立場は、誤りではない。ただ、独話と対話の連続性を一切認めないとするのは、誤りである。情報構造の側面からは独話と対話の連続性が認められる以上、独話と対話は截然と分けられるというわけでは決してない。情報構造の側面から認められる独話と対話の連続性が、言語的な構造の側面おいても見出せるのである。言語的な構造の側面における独話と対話の連続性を示す現象を一部の例外的なものと見なすのではなく、言語的な構造の側面における独話と対話の連続性を示す証左として積極的に認めるべきであろう。

もっとも、独話がすべて対話的な側面を持っている、と即断するわけではない。伊豆原（1998）が指摘するように、独話の中にも重層性があり、話し言葉的（＝対話的）な独話もあれば書き言葉的（＝独話的）な独話もあることは事実である。それは、伊豆原（1998）が指摘しているような時間的・空間的な制約以外にも、当該独話の話者が聞き手の存在を意識しているか、という要因も大きくかかわっている。

本稿で論じたトピックは、従来の言語研究における資料性の問題について再考する際の一つの材料になると考えられる。従来の言語研究では、独話と対話を截然と分ける傾向にあった。

そのため、言語的な構造の問題について、独話の中に見られる対話的な要素を看過する傾向にあった。しかし本稿で紹介したように、情報伝達の構造は勿論、言語的な構造についても独話と対話の連続性を示唆する要素が見出される。今後は、独話の中に見られる対話的な言語的な構造を記述するといった研究が展開できるのではないだろうか。

また、Ⅰ．で紹介した情報伝達の構造に見られる独話と対話の共通点を指摘した土岐（2001）・加藤（2001）・伊豆原（2002）は、（母語話者・非母語話者問わず）独話をいかに教育するかという視点に立っている。情報伝達の構造に見られる独話と対話の共通点を生かした独話教育の展開の可能性はそれらの文献に詳しいが、今後、言語的な構造の問題における独話と対話の共通点を生かした独話教育の展開が可能なのではないか。たとえば、具体的な項目としては、「独話においても、聞き手との関係・心的距離によって文末における「デス」・「マス」の「ス」の母音/u/を無声化と非無声化を切り替えるようにする」、「日本語教育においては句末が下降調になるイントネーションに着目した教育が試みられているが（中川2001a・b）、場合によっては（聞き手に働きかけたい場合など）上昇下降調を用いることも可能である」(15)という観点を、日本語音声教育の項目に入れることも、検討してよいのではなかろうか。

最後に、本稿で残された課題と将来の展望について述べ、本稿を閉じることにしたい。本稿では、言語的な構造の側面にも、独話と対話の連続性を認め得る要素があることを指摘したが、特に独話の中に対話の要素を見出すという側面に終始した。しかし、本当に独話と対話の連続性を認められるのであれば、独話の中に対話の要素が含まれるのは勿論、逆に対話の中に独話の要素が認められても然るべきである。しかし対話の中に独話の要素を見出すという研究は、今回、管見の限りでは見出せなかった。そのように考えると、今後、言語的な構造を重視する立場からも独話と対話の連続性を積極的に認める言説・研究や独話の中に対話の要素を見出す研究、さらには対話の中に独話の要素を見出す研究が生まれることを期待したい。

## 付記

本稿の内容の一部については、2005年度第1回博報「ことばと文化・教育」助成（「「標準語」の多様性」）を受けています。

## 参考文献

五十嵐陽介・菊池英明・前川喜久雄（2006）「韻律情報」『国立国語研究所報告124　日本語話し言葉コーパスの構築法』国立国語研究所

池田悠子（2000）『やさしい日本語指導5　音韻／音声』凡人社pp.61-62

伊豆原英子（1998）「独話の性格を形作るもの―話し言葉と書き言葉の観点から―独話教育のための基礎的研究（2）―」『名古屋大学　日本語・日本文化論集』第6号pp.15-34

伊豆原英子（2001）「指示語から見た話し言葉的独話と書き言葉的独話―独話教育のための基礎的研究（3）―」『愛知学院大学　教養部紀要』第48巻第4号pp.91-102

伊豆原英子（2002）「独話指導の見直しに向けて―「対話」という視点を取り入れることの必要性」『愛知学院大学　教養部紀要』第49巻第4号pp.33-44

宇井英俊（1971）「話しことばの範囲について」『日本文学研究』第10号pp.22-36

宇井英俊（1974）「戯曲に於ける話しことば」『日本文学研究』第13号pp.54-68
宇野義方（1955）「話しことばと書きことばの文法的特質」時枝誠記・遠藤嘉基監修『口語文法講座５　表現と文法』明治書院
上村幸雄（1997）「現代日本語　音韻」亀井孝・河野六郎・千野栄一編著『言語学大事典セレクション　日本列島の言語』三省堂
岡田祥平（2005）「文末位置の「デス」・「マス」の「ス」の母音の無声化―『日本語話し言葉コーパス』を用いた分析―」『2005（平成17）年度第19回日本音声学会全国大会予稿集』pp119-124
鹿島　央（2002）『日本語教育をめざす人のための基礎から学ぶ音声学』スリーエーネットワークpp.
加藤昌男（2001）「スピーチセミナーにみる先生たちの表現力」『日本語学』第20巻第６号pp.56-65
川上　蓁（1977）『日本語音声概説』おうふうpp.67-74
窪薗晴夫（1999）『現代言語学入門２　日本語の音声』岩波書店pp.38-44
小泉　保（1993）『日本語教師のための言語学入門』大修館書店pp.48
小磯花絵（2006a）「『日本語話し言葉コーパス』を用いた独話と対話の比較―韻律的特徴に着目して―」『社会言語科学会第17回大会発表論文集』pp.190-193
小磯花絵（2006b）「『日本語話し言葉コーパス』を用いた独話と対話の比較―統語的特徴に着目して―」『社会言語科学会第18回大会発表論文集』pp.208-211
郡　史郎（2003）「イントネーション」北原保雄監修・上野善道編『朝倉日本語講座３　音声・音韻』朝倉書店
国際交流基金（1978）『日本語　はつおん　英語版』凡人社pp.62-63
国際交流基金（今田滋子）（1981）『教師用日本語教育ハンドブック○６　発音』国際交流基金pp.81-85
国立国語研究所編（1955）『国立国語研究所報告８　談話語の実態』国立国語研究所pp.6-11
国立国語研究所編（1995）『国立国語研究所報告112　テレビ放送の語彙調査Ｉ』秀英出版p3
斎藤純男（2003）「現代日本語の音声―分節音と音声記号―」　北原保雄監修・上野善道編『朝倉日本語講座３　音声・音韻』朝倉書店
斎藤純男（2007）『日本語音声学入門　改訂版』三省堂p.83
桜井茂治（1998）「共通語の発音で注意すること」NHK放送文化研究所編『NHK　日本語発音アクセント辞典　新版』日本放送出版協会
城田　俊（1995）『日本語の音―音声学と音韻論―』ひつじ書房pp.77-78
鈴木英夫（1968）「「不整表現」の実態とその意義」『国語と国文学』第24巻第２号pp.36-48
土岐　哲（1986）「音声教育の面から見た教科書」『日本語教育』59号pp.24-37
土岐　哲（2001）「日本語のスピーチ教育」『日本語学』第20巻第６号pp.6-10
中川千恵子（2001a）「「へ」の字型イントネーションに注目したプロソディー指導の試み」『日本語教育』110号pp.140-149
中川千恵子（2001b）「「発音」クラスにおけるプロソディー指導―ピッチカーブを利用した指導法の実践―」『講座日本語教育』第37分冊pp.130-150
前川喜久雄（1989）「母音の無声化」杉藤美代子編『講座日本語と日本語教育２　日本語の音

声・音韻（上）』明治書院
前川喜久雄（1998）「音声学」田窪行則ほか『岩波講座　言語の科学2　音声』岩波書店
前川喜久雄（2001）「スピーチのデータベース―『日本語話し言葉コーパス』について―」『日本語学』第20巻第6号pp.12-27
前川喜久雄（2004）「『日本語話し言葉コーパス』の概要」『日本語科学』15pp.111-133

## 後註

(1) つまり、鈴木（1968）は、同じ独話（講演）であっても、発話の自発性の高低という観点から、単なる読み上げ（＝「準話しことば」）とそうでない場合（＝「変話しことば」）とを峻別しているということである。この姿勢は、「ことばがinpromptu（ママ）に発せられるか、impromptuでなく発せられたか」を基準にした宇井（1971）の視点に通じるものである。

(2) 鈴木（1968）によると、「「準話しことば」は、書きことばの単なる音声化に過ぎないという理由から、対象にしなかつた」とのことである。つまり、鈴木（1968）自発性がある（高い）「話しことば」を分析の対象にした、ということである。

(3) 文末における「デス」・「マス」の「ス」の母音の無声化には言及していないものもある（城田1995・前川1998・斎藤2007）。また、「デス」・「マス」限らず、語末・「切れ目」の直前の拍が無声子音の場合、その拍の母音が無声化すると指摘するものもある（川上1977・上村1997・桜井1998・斎藤2003）。この指摘に類するものとして、窪薗（1999）には、母音の無声化は、「無声子音と語境界の間で起こりやすい」という記述がある。なお、川上（1977）・上村（1997）では、無声化しない場合の規則も言及されている。

(4) CSJの概要については、前川（2004）などを参照のこと。

(5) 「コア」と呼ばれるデータは、分節音とイントネーションのラベリングが付与されるなど、「コア」以外のデータと比較して、より多様で精密な情報が提供されている。なお、コアには、基本的に首都圏方言話者（東京都・神奈川県・千葉県・埼玉県生まれの話者）のデータがおさめられている。したがって、岡田（2005）は、厳密には東京方言ではなく首都圏方言を対象に分析・記述した研究であることに留意する必要があるかもしれない。

(6) もっとも、話し言葉において「文」・「文末」の認定は非常に困難である。岡田（2005）では、以下の三つの条件すべてを満たすものを「文末」と見なしている（詳細は岡田2005を参照）。

①「デス」・「マス」が終止形であるもの
②直後に文節境界が存在しているもの
③「デス」・「マス」の「ス」の母音の/u/が、単純な下降音調をとっているもの

(7) 年齢の偏りは「どの学会でも研究発表をおこなうのは若手研究者が中心となるため」（前川2001）生じ、性別の偏りは「文科系では女性、工学系では男性」（前川2001）の発表者が多くなるため生じるという。また、使用語彙の偏りは、「学会ごとあるいは研究領域ごとに特定の専門用語が頻出する」（前川2001）ために生じるとのことである。

(8) 具体的には、以下のような点が考えられる。ただあくまで相対的な程度問題であり、ここで、日常会話と模擬講演がまったく同様の性質を有しているといっているわけではない。

・即興性の保持：日常の談話は即興性が高いと考えられる。一方、模擬講演は原稿に頼らないため、独話といってもある程度の即興性を保持している。反面、学会講演は原稿やメモに頼る話者も多いので、相対的に模擬講演よりも即興性が低い。したがって、即興性の保持という観点からは、学会講演よりも模擬講演のほうが日常の談話に近いといえる。

・情報の交換性：日常の談話は話し手と聞き手とが入れ替わるため、情報（ここでいう「情報」とは、言語的情報は勿論、非言語的情報も含む）の交換性が高い。一方、模擬講演は独話であるものの、聞き手が積極的に（意図的に）相槌などの反応を示しているため、少なくとも非言語的情報については交換性がある。反面、学会講演は、聞き手が積極的（意図的）に反応を示していないため、相対的に模擬講演よりも情報の交換性が低い。したがって、情報の交換性という観点からも、学会講演よりも模擬講演のほうが日常の談話に近いといえる。

(9) もちろん、対話に近い独話とそうではない独話とは単純に二分されるのではなく、グラデーション的に分類されるものであろう。この点については、Ⅳ．で紹介する伊豆原（1998・2001）の議論も参照。

(10) 郡（2003）では、上昇下降調以外に四つのイントネーションのパターンを認めているが、それぞれのパターンが文末と文節末に使われた場合、以下の付表のような機能を持つとしている。以下に示す機能はいずれも話者の気持ち・意図を聞き手に伝えるという言語的な構造に関わる意味合いが強く、情報伝達の構造に関わるものではない。

付表

| | 文末での機能 | 文節末での機能 |
|---|---|---|
| 疑問型上昇調 | ・疑問<br>・聞き手に回答や反応を求める | ・積極的な確認要求<br>・同意要求<br>・単なる注目要求 |
| 強調型上昇調 | ・強い主張 | 機能についての言及は特になし |
| 顕著な下降調 | ・意外な情報に接したことの表示 | 機能についての言及は特になし |
| 平調 | ・特別なものを持たない | 機能についての言及は特になし |

上の表を見てもわかるように、話し手と聞き手の関係に関すれば情報伝達の構造にかかわるイントネーションは、ほぼ上昇下降調だけだといえる。そのほかのイントネーションは発話意図といった、言語的な構造に関わるものである。

(11) 実際、上に引用した宇井（1974）での主張も、「センテンスの形式構造、特殊の語彙の使用頻度、音声表現など」といった文字化されたデータに観察される特徴をもとに導き出された結論である。また、鈴木（1968）には、「録音は、まず仮名タイプで打ち、それを修正して資料の決定稿を作つた」とある。

(12) 宇野（1965）は、「話しことば」・「書きことば」という用語の「規定が一通りではない」

と指摘した上で、少なくとも、「話しことば＝音声言語　書きことば＝文字言語」とする媒体別の観点からの定義と、「話しことば＝談話体のことば　書きことば＝文章体のことば」とする文体的な観点からの定義の別は考えなければならないと主張している。しかし、「話しことば」・「書きことば」という用語を媒体別の観点からの定義と文体的な観点からの定義を混乱して使用している例が散見される（伊豆原1998もこの二つの定義を混同しているきらいがある）。そこで、筆者はこの種の用語の使用の混乱を避けるため、以下に引用する国立国語研究所編（1995）に倣い、「音声言語」・「書記言語」・「話しことば」・「書きことば」という用語を明確に使い分けることにしている。

「文字言語」と「書きことば」、「音声言語」と「話しことば」とは、それぞれ、その指し示す範囲が必ずしも一致しない。この報告書では、文字および音声という媒体によって表されることばとしては「文字言語」「音声言語」という用語を用い、そこに文体的な意味合いを込める必要のある場合に限って「書きことば」「話しことば」という用語を用いることにする。

(13) テレビでは放送時間の問題から、必ず決められた時間内に話を終了しなければいけないという時間的な制約を大きく受ける。また、テレビには聴衆を目の前にしていない（できない）という空間的な制約も存在する。なお、同じテレビ番組でも、伊豆原（1998）では、「知の現在」は話し言葉的な独話とされ、「敬老の社会システム」は書き言葉的な独話とされているが、この両者の差異は、後者は「わずか10分という短時間でもあり、準備のあり方、話す時点での心のあり方」（伊豆原1998）が前者と後者とで異なることに起因していると説明している。また、伊豆原（1998）は、この両者の差異を生み出す要因として、前者が講義、後者が「あるテーマに基づいて話し手の意見を述べたもの」という「話題の違い」もあげている。Ⅲ．でも、独話と対話の違いに、話題の違いが影響を与えている可能性を示唆する小磯（2006a・b）の指摘を紹介したが、ここでも話題という要素が副次的な影響を与えているという事実は着目したい。

(14) 伊豆原（2001）は、以下の下線部の「コノ」がこの種の指示詞にあたるとしている。

…閉じられた社会の中に楽に生きていたこの江戸の人たちの生き方…

(15) ただし、これは、意味のかたまり、修飾関係に応じて適切なイントネーションを使える段階に至ってからの次の課題である。まずは、言語的な構造を表示するイントネーションが適切に使いこなせるようにならないと、聞き手が「何を言っているのか分からない」という状態に陥るからである。なお、母語話者にとっても、言語的な構造を表示するイントネーションを適切に使いこなすのは意外と困難なようであることを、付記しておきたい。